

台湾書院の祭祀活動について：祭祀の対象を中心に して

簡, 亦精
九州大学大学院

<https://doi.org/10.15017/18231>

出版情報：中国哲学論集. 35, pp.20-38, 2009-12-25. 九州大学中国哲学研究会
バージョン：
権利関係：

台湾書院の祭祀活動について

— 祭祀の対象を中心にして —

簡 亦 精

一 はじめに

書院という名称の成立時期は、唐代の六一八年から七二二年までの間と考えられる。^① 宋代（九六〇～一二七九）になると、①講学、②藏書、③祭祀などの重要要素が確立され、官学（官立学校）に対する私立学校として発展した。

「祭祀」は書院を構成する重要な項目の一つであり、歴代書院志の中に「祭祀」に関する記録が多いことから、その重要さが伺える。祭祀についての研究としては、鄧洪波、樊克政、李国鈞など各氏の書院に関する論考において、祭られる対象と式典の内容に重点を置いた言及が見られる。^② それに対して、高明士氏の「書院祭祀空間的教育作用」は、官学の廟（祭祀空間）学（教育空間）制の観点から書院の祭祀空間とその教育内容の分析を試みたものである。^③ また同氏の「新羅・高麗時代『廟学』制の創立と展開」では、「韓国などの東アジアの地域は、当時の中国の影響を受け、書院の祭祀空間とその教育内容は基本的に官学の「廟学制」と変らず、ただその内容は若干変容が見られる」と指摘する。^④ しかし、従来の書院研究は「祭祀」における地方書院の変容についてあまり注目しておらず、不明な部分が多すぎる。

書院の祭祀活動には、その時々々の学問的及び社会的状況が反映していると考えられる。本稿ではこの書院における祭祀の問題を、台湾書院の祭祀対象の例を中心にして考察していきたい。「書院祭祀」の地域的変容を明確にするこ
とで、儒教に立脚した伝統的な「書院祭祀」における土俗受容の様態や、各地域の知識人が如何なる思想、宗教上の
特徴を有していたかということを解明できると考える。

二 書院祭祀の成立

書院は中国に古くからある教育機構である。正式の文献記録としては、唐中期の玄宗時代に設置された麗正書院が
ある。唐の民間人の文献によれば、麗正書院の前に既に民間で書院的なもの（個人の読書の場）が存在し、そこで学
問の交流が行われていたということである。⁵⁾つまり、「書院」という呼称が見られるのは、唐初の民間書院である
という見方の方が妥当であろう。

しかし、唐初の民間書院は個人の読書の場としての性質に近いため、正式な教育施設ではなかった。麗正書院も、
講学を中心とする学校ではなく、学士を置いて古今の経籍を校勘したり、天下の遺書を収集したりする場所である。
現在でいえば、国家図書館のような働きをしていた場所である。

諸制度を完備した私立学校としての書院は、一般的に宋代に始まったと言われている。その教育内容は時代、地域
によっていくらかの違いを見せるが、基本的に民間教育機関として地域の人材育成を図ったものである。ここでは単
に学問の教授にとどまらず、倫理道德の修養を含めた全人教育（書院教育）が施された。宋代の書院は官学を補助す
る役割として教育の舞台で活躍するようになり、嵩陽書院・嶽麓書院・石鼓書院・睢陽（応天府）書院・白鹿洞書院
等が数えられる。これらの書院は唐代より続く「蔵書」機能を備えただけでなく、「講学」（教育活動）も行われた。

これに加えて、「祭祀」を行う書院も現れたのである。書院教育の最大要素として、①講学、②蔵書、③祭祀の三つ
が数えられる所以である。三者はそれぞれに補完するものであり、不可分のものではあるが、主に前二者は学問の教

授を、そして残る祭祀が倫理道德意識の涵養を担った。

祭祀は書院教育において極めて重要な要素であり、礼儀作法を教え倫理道德を養う役割を果たした。本来、儒教の伝統教育の中では「礼」を特別に重視し、たとえば、『礼記』祭統篇には、「凡そ治人の道は、礼より急なるは莫し。」とある。古代の学校（官学）では、人格教育の一環として祭祀活動を行ったのである。『礼記』文王世子篇には、「凡そ始めて学を立つる者は、必ず先聖、先師に積奠す。事を行ふに及びて、必ず幣を以てす。凡そ積奠する者は、必ず合すること有るなり。」⁷ また「始めて学を立つる者は、既に器に擧し幣を用ひ、然る後、積菜す。」とある。積奠や積菜は祭祀活動の一種であり、先聖や先師のような徳性が高い者を祭るのである。漢代に入ると、主に孔子を祭る行事として発展し、後に書院にもこの制度を取り入れ、積奠や積菜が行われるようになった。

宋代になって、「天下四大書院」を代表する嶽麓書院は、咸平二年（九九九）に作られた「潭州岳麓書院記」（石碑）に、「先師十哲の像を塑し、七十二賢を畫く。（中略）畢く旧制を案じ、儼然として生の如し。」と、祭られる対象が記録された。

白鹿洞書院を再建する際に、朱子は特に釋菜や禮殿のことに関心を示した。淳熙六年（一一七九）の「軍學の教授に屬す楊君大法は、星子縣令王君仲傑、其の事を董す。」、「鼓篋の始めは、賓を率ひ師生を佐け合ひ、釋菜の禮を恭しく修め、以て先聖及び先師に見ゆ。」と、また淳熙八年（一一八二）「錢三十萬に遺し、知軍の錢聞詩に屬し、禮殿兩廡並びに塑像を建つ。」学校の中心に、一つの祭祀空間を作り、学問の模範を樹立し祭祀活動を行うことによって、勉学に勤しみ、学ぶ者の向上意識を更に高める助けになるように考えられたのである。学ぶ者が祭祀空間に入って、先儒や先賢を描いた画像を見ると、自分も見習って同じように賢明になりたいとの気持ちを抱かせる。『論語』里仁篇に、「子曰く、賢を見ては斉しからんことを思い、不賢を見ては内に自ら省みる。」とあるように優れた人を見れば同じようにならうと思ひ、そうではない人を見た時に自分自身が心に反省するという考えである。

三 書院祭祀の対象となる人物

前述したように、初期（北宋時代）において書院の祭祀活動は、基本的に官学の祭祀制度（積奠・積菜）を受け継ぎ、祭祀の対象は孔子とその弟子であった。官学と同じように教学空間と祭祀空間を兼ね備えた書院は、その後、朱子や理学家の影響を受け、祭祀の対象となる人物は官学の祭祀形式にとられず、独自の道を歩み始めたのである。考亭書院（福建建陽）の祭祀対象について、朱子は次のように詳しく規制している。

「新書院告成、明日先聖先師を祀らんことを欲す。古に積菜の礼有り、約して行ふべし。遂に五礼新儀を檢べて、其の要を具へる者をして以て呈せしむ。先生終日、役を重す。夜帰り即ち諸生と礼儀を酌む。鷄鳴に起き、平明に書院に往き、序事を未だ備はらざるを以て、講堂に就きて礼す。宣聖像、中に居り、充国公顔氏、邨侯曾氏、沂水侯孔氏、鄒國公孟氏、西向北の上に配す。紙牌子を並ぶ。濂溪周先生、東の一。明道程先生、西の一。伊川程先生、東の二。康節邵先生、西の二。司馬温国文正公、東の三。横渠張先生、西の三。延平李先生、東の四。従祀も亦た紙牌子。」¹⁵

淳佑元年（一二四二）、朱子は「徽国公」の尊号を追加され、学宮に従祀されるようになった。以降（南宋〜清）、周敦頤・張載・程顥・程頤・朱子の五人は書院祭祀の主要対象となる。祭祀の対象となる人物が多様化し発展を続けたのである。主な祭祀対象は五種類に分けられる。一は先儒や先賢である。一般的には孔子・四配・十哲・七十二賢人、及び宋代や元代の代表的な儒学者である。書院は知識人が儒教の教えを学ぶ場所であり、孔子やその弟子或は各時代の代表的な儒学者を祭することは当然なことである。しかし、官学の中で祭られる人物と相違がないため、書院としての独自性は見られないのである。二は学派の創始者、あるいはその代表者である。例えば、程朱学派を代表する周敦頤・程顥・程頤・張載・朱熹、陸王学派を代表する陸九淵や王陽明、漢学派を代表する鄭玄・許慎・司馬遷・班固などは祭祀の対象となることが多い。以上の先儒や先賢は儒学の発展に大きな貢献をしただけでなく、一学派の代表として書院の教育方針を樹立する役割を担った。三は書院と関わりのある人物、あるいは書院の創建・復興・教学などの建設に功績があった人物である。例えば、書院の山長、地方の官吏、郷里の有力者などが挙げられる。「重

「教興学」の伝統を後進に受け継がせるといふ思いが込められている。四は各書院の所在地の有名人、あるいはこの地に住んだことがある名声や節操の高い人物、また書院の生徒などである。直接書院に貢献してはいないが、後進を励ます意味として書院内で祭るのである。明代や清代の官学（州学・県学）の中によく見られる郷賢祠や名宦祠の機能と似ている。五は学問や科挙に関係する神（特に道教の）である。例えば、学問を司る神である文昌帝君を祭ることはその例である。このような道教的な色彩をもつ書院祭祀は書院研究者に批判され続けてきた。書院祭祀は本来道徳教育のために用いられたのであるが、科挙試験の影響を受け、神の力に頼る祭祀活動は書院祭祀の異色のものとして登場したのである。次の章では台湾書院の祭祀対象を取り上げ、書院祭祀の地域的変容を検討したい。儒教に立脚した伝統的な「書院祭祀」が台湾における土俗の受容形態などどのように変化したのか、また台湾の知識人がどのように受け取ったのかを以下で見えていくことにする。

四 台湾の書院祭祀

台湾に本格的に書院が設置されたのは、清代になってからのことである。台湾の書院は康熙二十二年（一六八三年）から光緒十九年（一八九三）まで、二百年余りの歴史しかなかったが、当時の知識人や社会・文化の発展に大きな影響を与えた。中国本土の書院と同様に諸制度を完備した書院もあれば、規模が小さく私塾や義学（学費を払えない者のための学校）に近い性質の書院もある。書院の総数は六十ヶ所を越え、現在十六ヶ所が残されている。台湾の書院でどのような人物が祭られていたかを、王鎮華氏の『書院教育與建築』の資料に基づき、左のように表記してみた。

書院名称	設置場所	設立時期	祭祀の対象	組織
崇文書院	台湾府	康熙四十三年（一七〇四）	朱子・濂洛関閩五子・ ⁽¹⁷⁾ 寓賢八人・文昌帝君	官立

仰山書院	振文書院	螺青書院	明志書院(新)	文石書院	明志書院(旧)	龍門書院	白沙書院	南社書院	中社書院(奎樓書院)	海東書院
噶瑪蘭厅	彰化県(西螺)	彰化県	新竹	澎湖厅	淡水厅	諸羅県	彰化県	台湾県	台湾府	台湾府
嘉慶十七年(一八一七)	嘉慶十七年(一八一七)	嘉慶八年(一八〇三)	乾隆四十六年(一七八二)	乾隆三十一年(一七六六)	乾隆二十八年(一七六三)	乾隆十八年(一七五三)	乾隆十年(一七四五)	雍正七年(一七二九)	雍正四年(一七二六)	康熙五十九年(一七二〇)
濂洛関閩五子	文昌帝君 ²⁰⁾	文昌帝君	朱子	濂洛関閩五子・倉頡・文昌・文星・胡勉亭・韓蜚聲・蔣鏞・王廷韓等	朱子・胡焯猷及 ²¹⁾ 教官	倉頡・土地神 ¹⁶⁾ ・陳文起	文昌帝君	文昌帝君・倉頡	倉頡・朱子・文昌帝君・文衡帝君	濂洛関閩五子・文昌帝君
官立	民間	民間	不明	民間 (貢生建)	民間 (貢生建)	民間	官立	民間 (貢生建)	官立	官立

萃文書院	鳳儀書院	屏東書院	興賢書院	文開書院	藍田書院	登瀛書院	道東書院	明新書院	英才書院	磺溪書院
鳳山縣	鳳山縣	鳳山縣	彰化縣 (員林)	彰化縣	彰化縣 (南投)	彰化縣 (南投)	彰化縣 (和美)	彰化縣 (南投)	苗栗縣	彰化縣 (大肚)
嘉慶十七年 (一八一七)	嘉慶十九年 (一八一四)	嘉慶二十年 (一八一五)	道光三、四年 (一八三三、四)	道光四年 (一八二四)	道光十五年 (一八三五)	道光二十七年 (一八四七)	咸豐七年 (一八五七)	光緒八年 (一八八二)	光緒十五年 (一八八九)	光緒十三年 (一八八七)
文昌帝君	文昌帝君・奎 (魁) 星・倉頡	文昌帝君・濂洛關閩五子・孔子	五文昌帝君 ⁽¹⁹⁾	朱子・寓賢八人・濂洛關閩五子	朱子・文昌帝君・孔子	文昌帝君・朱子・倉頡・土地神	朱子・孔子・土地神	文昌帝君・朱子	文昌帝君・倉頡・韓愈	五文昌帝君
民間	官・民	官・民	民間 (貢生建)	官立	官・民	民間	民間	民間	民間	民間

先行研究を基礎として、台湾書院の祭祀対象を次の五点にまとめてみた。

- 一、先儒・先賢（孔子・韓愈）。
- 二、学派の代表者（周敦頤・程顥・程頤・張載・朱熹）。
- 三、書院に貢献があつた人物（龍門書院の陳文起、明志書院の胡焯猷、文石書院の胡勉亭・韓蜚聲・蔣鏞・王廷韓）。
- 四、台湾の教育に貢献があつた人物（寓賢八人）
- 五、文昌帝君・梓潼帝君・閔聖帝君・倉頡・土地神奎（魁）星などの神祇。

一見、台湾書院の祭祀対象は中国本土の書院と大きな相違がないと思われるが、台湾の複雑の政治事情や多民族性が書院祭祀に反映していると考えられる。台湾書院の祭祀対象の変化はこの二点に影響されることを、明鄭政権―清朝……日治時期……中華民国の順で検討していく。また、台湾の土俗的信仰による書院祭祀の地域的変容を考察する。明鄭時代（鄭成功政権）の台湾は、孔子廟（二六六六年完成）のほか、儒学校・社学・義学・私塾などの教育機関を設立していた。康熙二十二年（一六八三）、鄭氏一族が清朝に降伏し、その後台湾は清朝の領土の一部として統治されることになる。明朝が滅び、台湾にいる遺民たちは清朝にとつて、いつ清朝を脅かすか分からない不安定な存在であつた。台湾は直接中国大陸と繋がっていないため、清は巨大な軍事勢力を持っていても、台湾の状況を把握しにくいと言えよう。台湾にいる明朝の遺民や異民族に統治されたくない漢民族の知識人は、いつ反乱を起こしてもおかしくない政治環境にあつた。

儒学校（官立学校）とは違う書院（私立学校）を設置することは、民心を安定する効果があると考えられた。書院責任者の任命や教師はすべて朝廷から派遣し、国家の管理の下に伝統的な儒教教育を行う。そうすることによって、知識人に勉強できる場所を与え、将来朝廷に仕える人材を育成できる利点や、朝廷と台湾遺民との架け橋になれると

いう考え方であった。また、既存の施設（明鄭時代の義学）を利用することで、無駄な財力や人力の浪費を省き、後に正式の書院の設立を行おうとする時の土台を敷いたのである。清朝が取った政策は鄭氏政権の時にあつた九ヶ所の義学を書院にしたのである。次の九書院である。

書院名稱	設立場所	設立年代	設立者
西定坊書院	台湾府（現在の台南）	康熙二十二年（一六八四）	施琅（將軍侯）
鎮北坊書院	台湾府（現在の台南）	康熙二十九年（一六九〇）	蔣毓英（郡守）
彌陀室書院	台湾府（現在の台南）	康熙三十一年（一六九二）	王兆陞（台令）
竹溪書院	台湾府（現在の台南）	康熙三十二年（一六九三）	吳國柱（郡守）
鎮北坊書院	台湾府（現在の台南）	康熙三十四年（一六九五）	高拱乾（道憲）
西定坊書院	台湾府（現在の台南）	康熙三十七年（一六九八）	常光裕（道憲）
東安坊書院	台湾府（現在の台南）	康熙四十一年（一七〇二）	吳英（將軍）
西定坊書院	台湾府（現在の台南）	康熙四十三年（一七〇四）	王之麟（道憲）
西定坊書院	台湾府（現在の台南）	康熙四十八年（一七〇九）	王敏政（道憲）

この九ヶ所の書院は後に台湾書院の原型となり、設立者はすべて清朝から派遣された官吏である。教学の内容は初等教育レベルであり、具体的な祭祀活動は確認できなかったが、『福建通志』卷三十三を見ると、「蔣毓英（鎮北坊書院の設立者）が文教を振興し、捐俸、義學を創る。百姓は彼が建てた書院に碑を立てて、塑像を祭る」という記録が

残されている。諸制度が確立されない草創期の書院であったが、確実に儒教的な書院祭祀に従い、書院の創建・復興・教学などの建設に功績があった蔣毓英（書院関係者）を祀っていたのである。

この頃の中国本土では康熙帝が積極的に文教政策の改革に努めた。程朱理学を提唱するとともに、書院に書物や扁額を賜るような支援的姿勢を取ったのである。書院に奨励的な態度を取った康熙帝の影響を受け、康熙四十三年（一七〇四）、台湾の東安坊書院を改築し、崇文書院を創ることとなった。崇文書院は考課や科擧を中心に講学を行う書院であり、設備も制度も健全な正規の書院である。

崇文書院の敷地内に五子祠²²を設置し、周敦頤・程顥・程頤・張載・朱熹（濂洛關閩五子）を祀るほか、両側に台湾で功績があつた八人の賢人（寓賢八人）の位牌を奉じている。寓賢八人とは、明朝の沈光文・徐孚遠・盧若騰・王忠孝・沈佺期・辜朝薦・郭貞一と、清朝の藍鼎元のことである。周敦頤・張載・程顥・程頤・朱熹（朱子）の五人や書院に貢献があつた人物を祀ることは明清期の書院では一般的である。ここでは簡略に八人の賢人を祀る理由を説明する。

寓賢八人の八人は、それぞれ台湾の儒学教育に貢献した人物であり、しかも全員政治家である。なぜ、この八人は書院の中に祀られるようになったか。道光四年北路理番同知之鄧傳安が著した「文開書院從祀議」²³には、「當日、鄭氏（成功）に隨ひ台（台湾）に渡り、太僕（沈光文）と並に教を設けて人の争ひ從遊する者は、則ち幾社に名を重ずる華亭徐都御史孚遠有り、其の忠孝は太僕に同じ、甘心窮餓なり。百折不回となる者は、則ち同安の盧尚書若騰有り、惠安の王侍郎忠孝、南安の沈都御史佺期、揭陽の辜都御史朝薦、同安郭都御史貞一、其の文章太僕を上追す。兼ねて台湾に功績を著はす者は、則ち彰浦の藍知府鼎元有り。禮、応に並びて祀るべし。」²⁴と、八人が祭られた理由を簡潔に述べている。明朝の七人は、鄭氏とともに台湾に來た台湾教育の先驅者である。また、文才があり、教育に大きな貢献したことは間違いない。一方、清朝の藍鼎元（一六八〇〜一七三三）は内乱を平定した功績があり、福建の鼈峰書院と朱子学者の張伯行との縁が深く、自身も数々の作品を生み出す文化人ではあるが、教育より政治に対する貢献の方が大きかつたようである。

台湾は僻地にあり、明朝の最後の根拠地として鄭氏政権の支配下で繁栄した。清朝の皇帝が明朝の遺民に警戒心を持ちながら、書院で行う教育や祭祀を通して、台湾の知識人を網羅しようとする気持は「司馬昭の心は、路人皆知る」（司馬昭之心、路人皆知。）と同然であった。

五 書院祭祀と宗教信仰

次は、文昌帝君や魁星などの神祇を祀る書院のことを取り上げる。その前に、台湾の宗教事情を説明しておきたい。移民社会において、広く一般的に見られる宗教的特徴としては、少数の宗教的な職能者や専門家を除いた一般の人々の宗教は儒教・道教・仏教を中心とし、さらにより土俗的な信仰も内包した混淆宗教とするものである。²⁷さまざまな教理や教典にその起源を辿ることの可能な神的存在が同一の祭壇の上に並んでいるという状況は漢族社会においては頻繁に見られる光景である。²⁸台湾は原住民や中国からの移民によって形成された地域である。中国本土の漢族と同じような伝統的な信仰形態は、儒・仏・道の三つの制度宗教の影響を受けるのである。『台湾廟神大全』²⁹の統計によると、台湾において人々の人気を集め、盛んに祭祀されている神は、道教と仏教に起源を持つとされる王爺、観音佛祖の順で並び、孔子は二十五位に顔を出す程度である。台湾の人々の宗教的な関心は道教や仏教に重点が置かれているということである。

ただ、生活に不安感を抱える多くの移民（主に粵・閩・漳・泉から来た者）は、日常生活の中で生じる問題を解決するために神の力に頼る傾向が見られる。また、開墾のため台湾に移住してきた人々の教育水準があまり高くない原因と関係し、台湾の漢族の人々にとって病氣・家庭内の不和・仕事上の問題・将来の不安などごく日常的な問題をシャー・マニスティックな能力を持つ職能者に相談するのである。また、体系化された教典レベルの知識をある程度身につける道教の道士に頼り、人々の必要に応じて儀礼を行ってもらっているのである。シャー・マニスティックな存在の扶乩や通靈、道士の巫術を行って治病や魔よけを行うことを通じて、より有利に生活していこうとする。このように儒・仏・道の

三つの制度宗教の影響を受けつつも、現世利益を根本とし、教義の枠に捉えず、柔軟な特質を持つようになった。

連横氏は台湾の宗教を次のように定義している。（『台湾通史』）

「宗教の事は、各地俱に有り。處るところ同じからざれば、即ち祀るところの神も亦た異なる。是の故に山に居る者は虎を祀り、水に居る者は龍を祀り、陸に居む者は牛を祀り、澤に居る者は蛇を祀れば、則ち虎を祀る者を以て是と為して、龍を祀る者を非と為すを得ず。其の之を崇奉する所以の者を跡づければ、介福禳禍の心に出でざるもの莫くして、此れを以て神と為すなり。夫れ台湾の人、閩粵の人にして、又た漳、泉の分有り。粵人、至る所の地、三山国王を祀ること多し、而れども漳人は則ち開漳聖王を祀り、泉人は則ち保生大帝を祀る。是れ皆其の郷の神、介福禳禍する所以なり。夫の士子の文昌を祀り、商人の關帝祀り、農家の社公祀り、薬舗の神農祀り、木工の魯般祀り、日者の鬼谷祀り、業とすると同じからざれば、即ち祀る所も亦た異なる。是れ皆追遠報本の意有りて、敢えて其の先徳を忘れざるなり。」³⁰⁾台湾に移住してきた人々にとつて祭祀とは、天地の神や祖先の靈をまつり、それらの恩功に報いることである。科挙の受験勉強をしている学生（士子）の神は文昌帝君（文昌）であると明確にこの文章の中で述べている。こういう土俗的な信仰（文昌信仰）は台湾の移民社会においては、広く流布され伝承されて、日常生活の一部として行われてきた。

道教的神祇を祀る書院の問題に戻るが、文昌信仰の起源は宋代や元代の頃には信仰されていたとされ、明代や清代には道教の隆盛により、民間の儒学生の間人気を集めた。金の明昌二年（一一九一）、曲阜の孔子廟を修復する際、「藏書閣」を「奎文閣」（文昌閣）と改名する。これは文昌信仰を儒教に混入した嚆矢とされる。³¹⁾延祐三年（一二二六）、元の仁宗帝が「梓潼神」³²⁾を「輔元開化文昌司祿弘仁帝君」と名づけ、科挙の神として祀る。³³⁾『明史』³⁴⁾志第二十六、礼四に「夫の梓潼於蜀に顯靈し、廟食は其の地宜しと為す。文昌六星、之と涉らず、宜く罷免を救むべし。其の祠天下學校に在る者、俱に拆毀せしむ。」³⁵⁾とある。当時の礼部尚書周洪謨が土俗的な信仰に反対する立場を取っていたことがわかる。しかし、当時、上層知識人が文昌信仰のような道教的な祭祀活動に批判的な態度を持つていたにも関わらず、中・下級儒学生の信仰を集めるものとなった。³⁷⁾

台湾書院のうち、崇文書院・海東書院・中社書院（奎樓書院）・文石書院と祭祀内容が確認できない蓬壺書院（引心書院）に魁星閣（樓）が設置されており、文昌信仰はかなり早い段階から台湾書院に浸透していたことがわかる。文昌帝君信仰は自然に台湾書院の中に定着し、一部分の知識人が違和感を持つていても、書院祭祀から取り除くことができないのである。当時、台廈道を務めていた（台湾統治の最高責任者）陳瓊はその一人である。「新建文昌閣碑記」（一七一五）に次のように見える。

「嘗て文昌化書を讀み、中に二二幻の語有り、心竊かに之を疑ふ。既にして往復して玩味す。大旨人をして以て修徳積善をせしむ。梓潼帝君の陰騭文一篇と相ひ表裡す。是において深く其の言の道に得ること有るを信じ、誣ふことを予せざるなり。吾又た文昌と梓潼と、是れ一なるか、是れ二なるか、殆んど天人なるか、神なるかを知らず。（中略）科名者は、進身の階なり。學を務むるは、立身の本なり。學を務めずして功名を冀ふは、猶ほ種えずして收穫を期するがごとく、必ず之が數を得ざるなり。學を為すの道を願ひ、自ら放心を求め、始めて之を窺冥昏黙に求むれば、反つて其の心を無用に荒らすなり。」⁴³ 学校の中に文昌帝君を祀ることに對して、儒學者である陳瓊は心の中かなり葛藤を感じていたのであろう。しかし、「扶乩」信仰はすでに台湾儒學生の間に浸透して、台湾書院内で「扶乩」が行われたことが窺い知れる重要な資料と言える。

「扶乩」とは事物の吉凶を判断する占いの一種であり、扶箕、扶鸞とも呼ばれる。『古今圖書集成』神異典、第三十卷に『江西通志』に、文孝廟は吉安府の東に在り、梁の昭明太子統を祀る。飛鸞有り、事を判すること甚だしく靈應あり⁴⁴とある。「飛鸞」は扶乩のことであり、これは扶乩の起源とされるのである。知識人の間で扶乩信仰が流行したのは宋の頃とされ、扶乩を通して科挙試験の結果や問題を占うのである。扶乩信仰がピークに達したのは明清時代のことである。特に江蘇省や浙江省においてこの現象が顕著である。科挙試験の前に、扶乩を行わないと絶対に受からないという俗信を信じたのである。⁴⁵

前にも述べたが、台湾では異なる宗教起源をもつ存在神を同一祭壇の上に祀られることがしばしば見られる。それは二つ以上の宗教的要素の相互接触によって生じる現象・形態である。⁴⁶ 前掲の王鎮華氏の『書院教育與建築』によれ

ば、道教的な祭祀対象を祀る書院は当時の文化・経済の中心地を離れ、辺鄙な山間部に集中している。しかも、乾隆・嘉慶年間に個人によって創設された書院がほとんどである。後に、台湾は日本の植民地になることで、二一二年間の書院史の幕を下ろした。それがきっかけになって一部分の台湾書院は扶乩を行う鸞堂や孔子廟に変身したのである。鸞堂と結びつけることによって、道教的人物を祀る書院の土俗性を増す状況にあった。しかし、これらの書院は儒学を教える学校・地域の交流の場・善書の刊行所として生きていったのである。日本統治時代では台湾に対して教育の制限があったが、宗教上の礼拝を自由に行う権利は与えられた。台湾の鸞堂信仰は客家の人々が住んでいる新竹や苗栗地域の山間部がその発信地とされ、明新書院や英才書院と関わりが強く見られる⁴⁶。また、鸞堂と関係する関聖帝君（関羽）や五文昌帝君は、台湾書院の祭祀対象となっていることから、道教的な祭祀対象を祀る書院は性質が少し変わったが、今日まで生き残っているのである。

南投県の山間部にある藍田書院や明新書院の扶乩信仰が具体的にいつから始まったかは、まだ模索する段階にあるが、現在でも試験の合否占いなどを行っている。毎年『渡迷橋全集』、『扶鸞聖音』のような扶鸞を記録する善書が出版されている⁴⁵。

最後に、孔子廟に変身した台湾の書院を見てみたい。現在、孔子廟としての役割を果たしている書院は、文石書院・屏東書院・道東書院の三つである。王鎮華氏が提示した三書院の祭祀内容には、「屏東書院は、日據時代（日本統治時代）に孔子を祀り、毎年の二、八月の十四日に春・秋二祭を行う。」⁴⁵や、「道東書院は、後に孔子を祀る」とある。文石書院は戦火（中仏戦争）に焼かれ、現在の建物は修復されたものであり、日本統治時代以降孔子廟と改めたのである。「孔子廟重修捐題碑記」（一九三一刻）と「聖廟重修落成記」（同上）の二つの石碑が残されている⁴⁷。以上の記録から、この三つの書院は本来孔子を祀っていないことがわかる。

中国本土の書院が官立学校の制度を学んで孔子を祀ったことに対し、台湾書院は儒学を維持していくために孔子を祀ることになったのである。藤島亥治郎氏が台湾の建築に関する調査を行った際、台湾の文石書院や屏東書院について、「書院建築当初の姿を保っている」と高い評価を与えた。地方の有識者の臨機応変の処置によって書院は違う形

で生き抜いてきたと言える。書院の教育機能は失われたが、孔子廟として地方の文教事業を支えている。毎年、文石書院や屏東書院の中で祭祀活動を行い、儒教の伝統的な精神を今日まで継承することができたのである。

六 まとめ

本稿では台湾書院の祭祀対象を中心に述べてきたが、新たに以下の二点を提示したい。台湾書院の祭祀活動に関する詳細な分析は別稿にて論述したい。

① 中国本土と異なる点としては、孔子や・四配・十哲・七十二賢人及び宋代や元代の代表的な儒学者を祀らない。
(孔子廟となった書院は特殊な例としておく。)

② 周敦頤(濂)・程顥(洛)・程頤(洛)・張載(關)・朱熹(閩)の理学家を祀るが、それ以外の学派の儒学者を祀る事例は見当たらない。

中国の書院について、鄧洪波氏は次のように述べている。「何千年も続いた書院の発展の中で、異なる時期、異なる地域、異なる人々の異なる文化の教育要求を満たし、自ら一つの体系をなして、成長して、異なる教育領域、異なる教育階層にわたって、独自に運営ができる教育体系である。」(「中国書院教育的層次性」二〇〇七)。書院は違う地域で、その時代、人文に合うようにうまく融合し、独自の発展をしてきた。それは書院が長い時間を経て、さまざまな戦乱を乗り越え、今日までその影響力を持ってきた理由であり、魅力であろう。書院は地方の風習に影響される一面があれば、書院自身も社会や地域の風習と連動して影響を及ぼす一面もある。文昌帝君や扶乩信仰は、儒教的な書院祭祀から切り離されて、ただの俗信という扱いをされる。本来、祭祀活動は教育活動の一環として発展してきたものであるが、台湾の書院はただ単に教育の場であっただけではない。そこで行われた祭祀活動もただの教育の一環としてではなく、それぞれの地域の風習に合わせ、職業に合わせ、知識人の需要に合わせ、時代の流れに合わせて行われてきたものである。台湾の書院祭祀は融合性と多様性を兼ね備える柔軟な性格を持っていると言えよう。

【注】

- (1) 鄧洪波『中国書院史』（国立台湾大学出版中心、二〇〇五年）六十六頁を参照。
- (2) 鄧洪波『中国書院史』（国立台湾大学出版中心、二〇〇五年）樊克政『中國書院史』（文津出版社、一九九五年）李国鈞『中国書院史』（湖南教育出版社、一九九四）。
- (3) 高明士『中国中古的教育與学礼』（台湾大学出版中心、二〇〇五年）。
- (4) 高明士『東亜古代的政治與教育』（台湾大学出版中心、二〇〇四年）三三五頁を参照。
- (5) 鄧洪波『中国書院史』（国立台湾大学出版中心、二〇〇五年）二頁を参照。
- (6) 凡治人之道、莫急於礼。
- (7) 凡始立学者、必积奠於先聖先師、及行事必以幣。凡积奠者、必有合也。
- (8) 始立学者、既奠器用幣、然後积菜。
- (9) 王禹（九五四—一〇〇二）、「潭州岳麓書院記」（石碑）、北宋咸平三年（九九八）。
- (10) 塑先師十哲之像、畫七十二賢。（中略）畢按舊制、儼然如生。
- (11)（清）毛德琦『白鹿書院志』卷十二、呂祖謙『鹿洞書院記』、「屬軍學教授楊君大法、星子縣令王君仲傑董其事。」、卷二、朱熹「書院成告聖文」、「鼓篋之始、敢率賓佐合師生、恭修釋之礼、以見于先聖及先師。」
- (12)（清）謝旻『江西通志』卷二十二、書院二、「遺錢三十萬、屬知軍錢聞詩建禮殿兩廡並塑像。」
- (13) 李国鈞主編『中国書院史』（湖南教育出版社、一九九四年）一六三—一六四頁を参照。
- (14) 『論語』里仁篇「子曰、見賢思齊焉、見不賢而内自省也。」
- (15) 『朱子語類』（上海古籍、二〇〇二年）卷九十一「新書院告成、明日欲祀先聖先師。古有积菜之礼、約而可行。遂檢五礼新儀、令其要者以呈。先生終日董役、夜掃即與諸生酌礼儀。鷄鳴起、平明往書院、以序事未備、就講堂礼。宣聖像居中、充国公顏氏、邠侯曾氏、沂水侯孔氏、鄒國公孟氏西向配北上。並紙牌子。濂溪周先生、東一。明道程先生、西一。伊川程先生、東二。康節邵先生、西二。司馬温国文正公、東三。横渠張先生、西三。延平李先生、東四。從祀。亦紙牌子。」

(16) 福德正神のこと。五世紀には道教の教典の中にその名前を見せられているという。その土地で功績があり陰徳を積んだ人が死後任命され、昇進・転任・左遷などもある。まれに土地神が特定の神と結びつくこともあり、韓文公（韓愈）、岳飛、項羽などの例が挙げられる。台湾では、土地公・伯公などと呼ばれて祀られており、毎月の初二日、二月二日の誕生日には祭祀活動を行う。

(17) 周敦頤（濂）・程顥（洛）・程頤洛（洛）・張載（關）・朱熹（閩）。

(18) 明朝の沈光文・徐孚遠・盧若騰・王忠孝・沈佺期・辜朝薦・郭貞一と、清朝の藍鼎元。

(19) 呂岳・孔子・老子・張俊・關公。

(20) 文昌帝君・關聖・呂岳・朱衣帝君・綠衣帝君。

(21) 明代や清代の官立学校の教員のこと。

(22) 五子祠は、濂溪の周敦頤、洛陽の程顥及び程頤、關中の張載、閩中の朱子の五人を合わせて祭る特殊の祭祀である。王文華氏の調査資料を見る限り五子祠と別に朱子（朱熹）を主祭として奉るようである。

(23) 周璽『彰化縣志』「文開書院從祀議」（清）道光十六年（一八三六）。

(24) 幾社は明末の陳子龍らにより創立された政治結社である。

(25) 「當日隨鄭氏（成功）渡台、與太僕（沈光文）並設教而人爭從遊者、則有名重幾舍之華亭徐都御史孚遠、其忠孝同於太僕、甘心窮餓。百折不回者、則有同安盧尚書若騰、惠安王侍郎忠孝、南安沈都御史佺期、揭陽辜都御史朝薦、同安郭都御史貞一、其文章上追太僕。兼著功績於台灣者、則有彰浦監知府鼎元、禮應並祀。」

(26) 周璽『彰化縣志』学校志（清）道光十六年（一八三六）。

(27) 佐々木宏幹『宗教現象の諸形態』（東京・弘文堂、一九八一年）三十七―三十八頁。

(28) 五十嵐真子『現代台湾宗教の諸相』（人文書院、二〇〇六年）四十七頁。

(29) 仇徳哉『台湾廟神大全』（台北楓林印刷設計企業社、一九八五年）。

(30) 「宗教之事、各地俱有、所處不同、即所祀之神亦異。是故山居者祀虎、水居者祀龍、陸居者祀牛、澤居者祀蛇。則不得以

祀虎者為是、而祀龍者為非。跡其所以崇奉之者、莫不出於介福禳禍之心、而以此為神也。夫台灣之人、閩粵之人也、而又有漳、泉之分也。粵人所至之地、多祀三山國王、而漳人則祀開漳聖王、泉人則祀保生大帝、是皆其鄉之神、所以介福禳禍也。若夫士子之祀文昌、商人之祀關帝、農家之祀社公、藥舖之祀神農、木工之祀魯般、日者之祀鬼谷、所業不同、即所祀亦異。是皆有追遠報本之意、而不敢忘其先德也。

(31) 高文、范小平編著『中国孔廟』(成都出版社、一九九四年)を参照。

(32) 四川省の地方神祇、生前の名前は張亜子である。任繼愈主編『中国道教史』(上海人民出版社、一九九〇年)を参照。

(33) 呂宗力、樂保群編『中国民間諸神』(台北・学生書局、一九九一年)一二二頁を参照。

(34) 楊家駱主編『新校本明史并附編六種』(鼎文書局、一九七八年)。

(35) 夫梓潼顯靈於蜀、廟食其地為宜。文昌六星與之無涉、宜赦罷免。其祠在天下學校者、俱令拆毀。

(36) 周洪謨(一四二一—一四九二)、字堯弼。四川省敘州府長寧縣在城鄉(今宜賓市雙河鎮)人。

(37) 陳昭瑛「台湾的文昌帝君信仰與儒家道統意識」(一九九七年)参照。

(38) 王鎮華『書院教育與建築』「台湾書院建築個案之圖片資料」(故鄉出版社、一九八六年)参照。

(39) 陳瓊(一六五六—一七一八)、字文煥、號眉川、廣東海康縣人。康熙四九年(一七一〇)台廈道(官職)に赴任。著に『陳清端公文集』がある。

(40) 嘗讀文昌化書、中有一二幻語、心竊疑之。既而往復玩味、大旨教人以修德積善、與梓潼帝君陰騭文一篇相表裡。於是深信其言之有得於道、不予誣也。吾又不知文昌之與梓潼、是一、是二、殆天人也耶、神耶。(中略)科名者、進身之階、務學者、立身之本。不務學而冀功名、猶不種而期收穫、必不得之數也。願為學之道、自求放心、始求之竊冥昏默、反荒其心於無用。

(41) 江西通志、文孝廟在吉安府東、祀梁昭明太子統。有飛鸞、判事甚靈應。

(42) 許地山『扶箕迷信的研究』(北京・商務印書館、一九九九年)三十三頁を参照。

(43) 佐々木宏幹「宗教現象の諸形態」(一九八一年)参照。

(44) 周怡然「終戦前苗栗客家地域鸞堂之研究」(二〇〇八)第三章、「文人書院與鸞堂」参照。

- (45) 明新書院『扶鸞聖音』（圓縁園雜誌社發行、出版年不明）。
- (46) 屏東書院、日據時代祀孔子、毎年二、八月十四日春秋二祭。
- (47) 行政院文化建設委員會澎湖風文化局『澎湖風情現菊島文化傳』（澎湖風馬公市・澎湖風文化局、二〇〇四年）
- (48) 藤島亥治郎（ふじしまがいじろう）、一八九九年五月一日―二〇〇二年七月十五日。著書に『台湾の建築』（二九四八年）等がある。